



イエジー・スコリモフスキ 監督  
『EO イーオー』を観て

旅するロバの物語、全世界が息を呑んだ、現代の寓話×無比の映像体験



□ ベール・ブレッソンの『バルタザールどこへ行く』(1966)から着想したという今作品。一昨年春、札幌で上映された『バルタザール〜』を観ていたので、対比ができた。『バルタザール〜』は少女マリーとバルタザールという名のロバの話で数奇な運命を描いている。これは『EO イーオー』のサーカスの女性カサンドラとの関係に類似している。私にとってカサンドラを演じるサンドラ・ジマルスカは初見であるが、魅力的。EO はあちこち引きずり回されて、ロード・ムービー的な要素もある。『EO』を観終わって、これは今話題

を集めている難民問題をロバに仮託させた作品ではないかと思った。G7の難民認定率は格差がありすぎて驚かされる。イギリス、カナダは60%台、フランスでさえも17.5%なのに日本は僅か0.7%である(2021難民支援協会)。EO は「難民」のように思われた。これは私個人の思いであるが…。  
エンドクレジットで、ロバは6頭使われたことが判る。それとロバにとっては冤罪だが、サッカーのゴールをめぐる乱闘騒ぎが印象に残った。また、撮影の陰影さがよかった。流石 J.スコリモフスキである。(佐藤見一、会員)

や さしい瞳をもつロバと一緒に旅をしながら、多くのものを感受する体験型映画だった。すでに内面にある問題意識、願望、嫌悪、不安をあぶりだす仕掛けがあるのではと、不思議な感覚に囚われた。最近になって、『バルタザールどこへ行く』も鑑賞でき、前後して記憶をたどる体験の楽しさも加わった。金属スクラップヤード、対人地雷の探知除去の犬型ロボット、巨大ダムからあふれ出す水、風力発電の風車が回る広大な土地、そして森の中で。ほとんど演技もせりふもないまま、ロバ EO(イーオー)の神々しいほどに美しい佇まい。映像に魅了されながら、なにかざらつきを残すのだ。人間社会のフリーガンの過激さ、肥満、タトゥー、薬物、近親相姦、殺人、貧困、動物虐待のモチーフがちりばめられ醜悪さが極る。本作は、より複雑に絡み合う社会の中で生きる今に、ささる作品だった。(氏間多伊子、会員)

□ バの目は実に美しい。純粋さや愁い・悲しみを湛えている。実際、ロバの出てくる映画には秀作が多く、今年だけでも『EO』、『イニシエリン島の精霊』、『小さき麦の花』が公開された。ロバの鳴き声は人間の言葉では表現できない。まるで、この悲しみを伝えきれないもどかしさを表現しているかのようだ。  
本作は『バルタザールどこへ行く』(ロベール・ブレッソン監督 1966)にインスパイアされて制作されたものという。『バルタザール』は私にとって人生ベストの一本であり、涙なしには見られない。だが、本作は『バルタザール』よりもロバの目から見た人という視点、人間の愚かさをより強調しているという違いがある。強いて難を挙げれば、『バルタザール』を見た後では本作には若干の既視感がある点だが、大きな問題ではない。  
『バルタザール』はドストエフスキー作『白痴』の第1部第5～7章を元にしてしている。スイスで病氣療養中のムイシュキン公爵がロバの鳴き声を聞いて深く感動する。その話を聞いてエパンチン将軍夫人は「ロバですって」と驚き、娘達は大笑いする。ロバという言葉には愚か者の意味があるからだが、ロバはイエス・キリストがエルサレム城に入城した時に乗っていた動物で、キリスト教では「聖愚者」でもある。(そのパロディとしてドン・キホーテの従者サンチョ・パンサもロバに乗っている。「バルタザール」とはイエスが生まれた時、「神の子」だと告げに来る「東方の三博士」(マタイの福音書)の一

人である。)人から馬鹿にされ笑われているが、その心は純粋で美しい。美しすぎるのだ。両作ともヒロインがロバに示す愛情は深く、ブレッソン監督は「ロバはエロティックな動物である」と語っている。  
また、イギリス童話『くまのプーさん』には悲観主義的でのろまだが、お人好しなロバの縫いぐるみ「イーヨー」が登場する。ロバの鳴き声からネーミングされ、ディズニーでアニメ化された。  
大江健三郎は『静かな生活』で、知的障害があるが音楽的才能を持つ長男の光をモデルにした「イーヨー」という人物の成長と知的障害者との共生をテーマとする物語を描き、義兄に当る伊丹十三監督が映画化した(1995)。この作品も「聖愚者」的な要素を持った物語といえる。  
『白痴』では、ムイシュキン公爵は滝の音を聞いて、しみじみとした感情を抱く。『バルタザール』では滝のシーンは少ししか描かれていないが、本作ではダムから轟音をあげて落下する水のシーンとして描かれ、実に素晴らしく神々しいほどだ。それに引き換え、次々と起こる人間の行為の何と愚かなことか。  
『バルタザール』も『EO』も、人間の罪を背負って十字架につくイエス・キリストに見えてくる。即ち、「バルタザール≒EO≒ムイシュキン公爵≒イエス・キリスト」と見て大きな誤りはあるまい。私はこれからも両作を見続けていくことと思う。(池田光良、会員)